

子ども向けくずし字解読体験の取り組みについて

- 茨木市立文化財資料館「くずし字チャレンジ」の事例から -

柴崎 謙信

1. はじめに

本稿では、茨木市立文化財資料館（以下、資料館とする）で令和4年度夏休みイベントとして実施した「くずし字チャレンジ」（以下、「くずし字チャレンジ」とする）の取り組みについて紹介し、その成果と課題について簡単に述べたい。

まず、博物館における子どもを対象としたくずし字を扱う体験やイベントの現状について触れておきたい。現在、多くの歴史系博物館で開催されている古文書教室は、全世代を対象としたものである。しかし、参加者の大半は大人で、内容も基本的には大人を対象としたものとなっており、子どもが参加することは容易ではないといえよう。このような状況にあつては、子どもがくずし字に触れる機会は必ずしも多いとはいいがたい。

その背景には、くずし字が漢字を含むことや我々が現在使用している楷書体とは異なる独特の運筆であることなどから、それらを解読することは、大人でも容易でないため、子どもにとってはなおさら難しいという先入観があるとされる（高橋2013・2014）。そのため、子どもを対象とした体験講座やイベントのうち、くずし字を扱うものは決して多いとは言えないように思われる（註1）。

一方で、小学生向けの古文書解読教育プログラムの開発を行った高橋修氏は、パズル的要素の強いくずし字の解読は、大人よりむしろ子どもの方が優れた能力を発揮する可能性を秘めており、「古

文書は大人向け」ではなく、「小学生だから読める」という視点へ転換すべきであり、子どもの頃にこそ習得すべき学習内容であるとされる（高橋2014）。

このように、子ども向けのくずし字を扱う体験やイベントへの取り組みの度合いは各館により様々であるが、近年、博学連携の可能性を秘めるものとして、注目されつつあるというのが現状である。

2. 取り組みの背景

資料館では、『新修茨木市史』の編さんにあたって収集した文献資料（古文書）や歴史関係の図書を閲覧できるスペースとして、令和4年（2022年）3月31日より郷土史料室を開室した。

郷土史料室では、当初、文献資料（古文書）閲覧のための利用が主であると想定しており、大半が大人の利用者となると想定していた。しかしながら、想定していた以上に小学生の利用者や親子連れの利用者が多く、郷土史料室では、配架している歴史漫画や図鑑を閲覧してもらった。その中でも古文書やくずし字に興味を示した子どもが一定数おり、古文書の実物を見てもらったり、配架しているくずし字初学者向けの書籍を紹介したりするなどして、古文書やくずし字に触れてもらう機会を提供できるように努めた。しかし、現在刊行されている初学者向けのくずし字解読の書籍は、初学者向けとはいえ、大人の読者を想定したものであり、子どもの初学者に十分に対応したのではなく、必ずしも要望に応えることができるとは言い難い状況であった。

「くずし字チャレンジ」は、そのような子どもたちにくずし字に触れてもらう機会を提供するとともに、その体験を通じて、郷土の歴史資料としての古文書に親んでもらうことにつながればと考え、企画したものである。

なお、資料館では、2015年度に小学生を対象としたてん刻・花押の作成体験や中学校の職場体験・高校の課外授業において、手習帳を題材として、くずし字を扱う体験を実施している（高橋



図1 くずし字チャレンジの問題冊子

2016)。

3. 取り組みの内容

「くずし字チャレンジ」では、冊子(図1)を作成し、くずし字の解説やくずし字に関連する問題の解答を専用の用紙に記入してもらい、答え合わせをした後、問題の解説と景品としてくずし字の缶バッジを配布した(図2)。それぞれ問題の異なる4種類の冊子を用意し、一回限りでなく、複数回楽しめるようにした。

「くずし字チャレンジ」の特色として、以下の三点をあげることができよう。一点目は、初めてくずし字に触れる子どもでも解説できるように工夫した点である。くずし字は続け字で書かれているため、文字と文字の切れ目がわかりにくく、初学者にとっては、解説を進める上で障害の一つとなっている。そこで、続け字で書かれている部分を一文字一文字に分解することにより、読みにくさを極力取り除くようにした(図3)。また、解説する際の補助として、くずし字に赤字で運筆を重ねることにより、くずし字特有の続け字や省略による難解さを取り除くことでより読みやすいように工夫を加えた(図3)。さらに、難易度の高い問題は、くずし字(変体仮名)とひらがなの対応表から同じくずしの字を探してもらうことで、パズル感覚で取り組みやすいようになっている。

二点目は、設問における工夫である。問題は、子どもたちも実感が湧きやすいように、近代の献立の古文書(註2)から野菜や果物のくずし字を取り上げた。例えば、天保年間(1830年～1843年)から栽培され、現在、千提寺地区でのみ栽培されている三島うど(註3)や昭和後期まで茨木市の山間部で製造されていた寒天(註4)などの茨木市域の特産とされるものを中心に取り上げた。このように、小学校社会科の学習(註5)と関連させることで、夏休みの自由研究などへの活用も視野に入れた。

三点目は、継続的にくずし字に触れてもらえるように工夫した点である。帰宅後もくずし字に親しむことができるように、解いてもらった問題の



図2 くずし字缶バッジ

三点をあげることができよう。一点目は、初めてくずし字に触れる子どもでも解説できるように工夫した点である。くずし字は続け字で書かれているため、文字と文字の切れ目がわかりにくく、初

学者にとっては、解説を進める上で障害の一つとなっている。そこで、続け字で書かれている部分を一文字一文字に分解することにより、読みにくさを極力取り除くようにした(図3)。また、解説する際の補助として、くずし字に赤字で運筆を重ねることにより、くずし字特有の続け字や省略による難解さを取り除くことでより読みやすいように工夫を加えた(図3)。さらに、難易度の高い問題は、くずし字(変体仮名)とひらがなの対応表から同じくずしの字を探してもらうことで、パズル感覚で取り組みやすいようになっている。

二点目は、設問における工夫である。問題は、子どもたちも実感が湧きやすいように、近代の献立の古文書(註2)から野菜や果物のくずし字を取り上げた。例えば、天保年間(1830年～1843年)から栽培され、現在、千提寺地区でのみ栽培されている三島うど(註3)や昭和後期まで茨木市の山間部で製造されていた寒天(註4)などの茨木市域の特産とされるものを中心に取り上げた。このように、小学校社会科の学習(註5)と関連させることで、夏休みの自由研究などへの活用も視野に入れた。

三点目は、継続的にくずし字に触れてもらえるように工夫した点である。帰宅後もくずし字に親しむことができるように、解いてもらった問題の

解説プリント(図4)を配布した。さらに、景品として、くずし字をモチーフにしたイラスト(註6)をあしらった缶バッジを配布した。この缶バッジをカバンなどに着けて利用してもらうことでよりくずし字に親しめるようになっている。

4. 成果と課題

「くずし字チャレンジ」には、34日間(令和4年7月21日(木)～8月24日(水))で延べ116人の参加があった。なかには、用意した4セットにすべて挑戦した子どもも複数人いた。子どもたちからは「もっとくずし字の問題を解きたい」という意見があり、想定した以上に子どもたちの学習意欲を引き出すことができ、くずし字や古文書への興味・関心を伸ばすことに一定の効果があったと考えている。

特に、くずし字で自分の名前を書いてもらう設

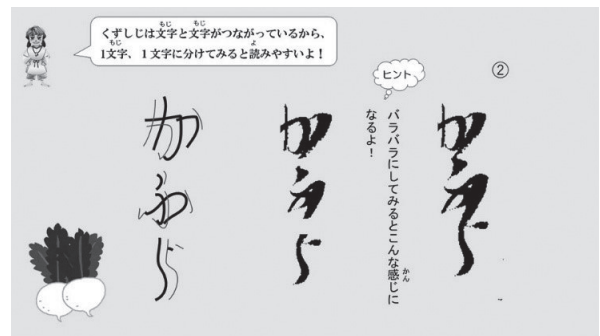


図3 問題(部分)

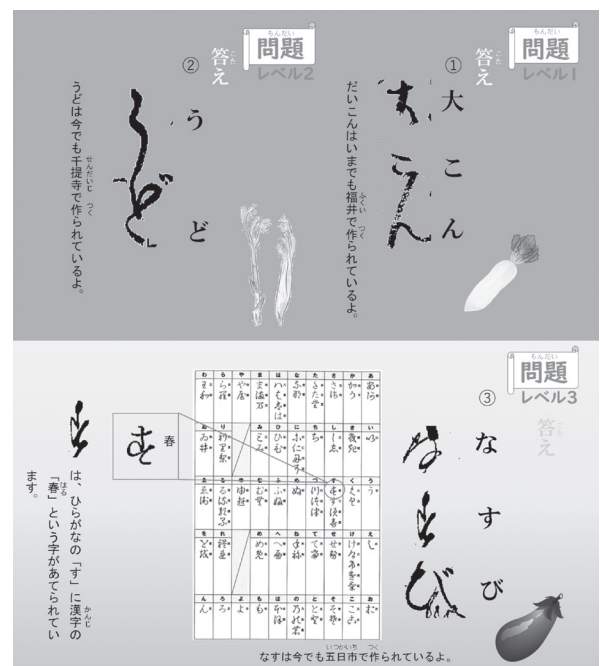


図4 解説プリント

問では、「こんなに字があるんだ！」という感想があり、変体仮名では、複数のくずしがあることへの驚きを示していた姿が印象的であった。くずし字の解読をできるようにするためには、くずし字の筆跡を真似ることも有用である。参加してくれた子どものほとんどが正確に真似て書くことができしており、子どもたちの形体把握に対する高い能力を有していること（高橋 2014）を再確認することができた。

また、小学校の社会科と連動できるように問題を設定したことで、古文書を通じて、近世・近代に栽培されていた野菜や果物が現在も栽培されていることを確認してもらうことができたと考えている。この体験を通して、歴史は遠い過去の事象ではなく、我々の生活に根差したものであることを少しでも感じ取ってもらえたのではないだろうか。

以上から、扱う題材（史料）や解読のための補助に少し工夫を加えることにより、子ども向けの古文書解読の教材を開発することができること（註7）、また、小学校の社会科の教材として活用できる可能性があることが明らかとなった。

ある程度の成果を得ることができた反面、課題も浮かび上がってきた。一点目として、問題のレベル設定があげられる。今回は、小学校低学年でも解読できるように、問題はすべて変体仮名のくずし字を設定した。しかし、「もっと難しい問題を解きたい」という意見もあり、高学年以上の子どもにとっては少し易しい問題となってしまったかもしれない。今後は、学年・年齢や学習の到達レベルごとに問題のレベルを設定するなどの工夫が求められるだろう。

二点目は、くずし字解読体験と展示との連関である。今回は、資料館の展示資料と「くずし字チャレンジ」を関連させることはできなかったが、両者を関連させることにより、展示資料への理解を深めることにつながると考える。資料館の場合、例えば、古文書を扱う企画展やテーマ展と連動して、展示資料の古文書を鑑賞する前後に、それに関するくずし字の解読体験を行うなどが考えられる。ただし、古文書は難解なものが多いため、古文書の内容は、子どもでも親しみやすい内容のものを選択し、加えて、従来の古文書講座のように一字一句を解読するのではなく、特色のある箇

所のみを解読対象とするなどの配慮が必要となる。

第三に、教育現場における教材としての活用である。近年、教育現場では、総合的な学習の時間における教科等横断的な学習の充実が求められている（文部科学省 2021）。くずし字を扱った体験や学習は、後述するように社会科以外の教科とも接続できうという点から、小学校・中学校における「総合的な学習の時間」の指導要領に示される「地域や学校の特色に応じた課題」において（文部科学省 2017a、2017b）、活用の可能性を秘めていると考える（註9）。「くずし字チャレンジ」はその一例として位置付けることができよう。今回は、小学校社会科、特に地理分野との連動を念頭に置いたため、他の分野との連動ができなかった。例えば、今回取り上げた献立表には、現在でも食されている料理も見られ、当時の食材と現在の食材を比較することもでき、家庭科の学習と接続できる可能性がある。今後は、古文書は社会科（歴史分野）の教材という認識にとらわれることなく、他の分野の要素を引き出していくことにより、総合的な学習に資するような教材を開発していく必要があるだろう。それにより、子どもたちの興味関心を広げるとともに、子ども向けの古文書解読の学習意義を示すことができると考える。

5. おわりに

歴史系博物館では、古文書が展示資料の一定の割合を占めるという現実がある。古文書は、一見難解であるが、たとえ、全く解読できなくとも、くずし字に触れる体験を通して、「くずし字で書かれている」という事実を知ってさえいれば、そうではない場合に比べて、古文書に対して、より親近感を獲得することができるのではないだろうか。また、くずし字に触れる体験を重ねることにより、古文書をきっかけとして、郷土の歴史への関心を深めることにつながると考えている。

そのような体験には、子ども向けのくずし字解読教材はなくてはならないだろう。その作成にあたり、基本的な部分については、高橋氏が開発された「プログラム」などを参考にすることはできても、それぞれの博物館では扱う史料は異なるわけであるから、担当者がどのような題材（古文書）を選択するかが重要となってこよう。そういった

意味でも、「くずし字チャレンジ」が、子ども向けのくずし字解読教材の一事例として、少しでも参考となれば幸いである（註9）。

註

- 1) くずし字を扱った事例としては次のようなものがある。大分県立先哲史料館では、「大人でも難解な崩し字の古文書が、子どもに読めるはずがない」という歴史の世界の常識を取り払い、子どもたちに歴史解明の醍醐味を体感させたいという目的で、くずし字と現代漢字の対応関係を一つのコマに集約したものを文字数分用意して、くずし字1文字1文字に当てはめることで古文書全体の解読が可能となる古文書解読キットを開発し、解読体験を実施している（鹿毛2002）。また、大仙市アーカイブスでは、「なるほど！かんたん！くずし字講座～夏休み子ども向け講座～」として、昔の子どもが実際に使った双六や当て物を題材にして、くずし字に触れる体験講座を実施している（大仙市2019）。
- 2) 年月日未詳「献立」（当館保管「池上家文書」6-147）、年月日未詳「初集り献立、買物」（同上「池上家文書」6-550）。
- 3) 近世以降の三島うどの栽培については、茨木市史編さん委員会2016abを参照。なお、2021年時点では、茨木市域での三島うどの栽培を行っている農家は千提寺地区の農家一戸のみとなっている（茨木市産業環境部．“三島独活”．茨木市．2021, <http://city.ibaraki.osaka.jp/kikou/sangyo/noutomidori/menu/nougyoutokusan/ibarakinougyoutokusanbutsu/mishimaudo.html>, 参照2022年12月28日）。
- 4) 茨木市域における近代以降の寒天栽培については、石坂2013、茨木市2016などを参照。
- 5) 茨木市教育研究会小学校社会科部会2019 pp. 58には、「茨木市のくふうして作っている農作物」として、市域で栽培されている主な農作物が地図付きで紹介されている。
- 6) 缶バッチのイラストのデザインは、資料館史料調査員の瀧浦つかさ氏が担当した。
- 7) もちろん大人向けとしても有効と考えている。今回も、「くずし字チャレンジ」に興味を持ち、取り組んでいただいた大人の利用者の方もおられた。
- 8) 高橋氏も、社会科・書道・国語（古文）など複数の教科に関連し、横断的な新教科に発展する可能性

を秘めているとされる（高橋2013）。

- 9) 今後も子ども向けの体験型のイベントは継続的に進めていく必要があると考えている。なお、「くずし字チャレンジ」終了後も、「くずし字チャレンジ」で使用した4つの冊子をダイジェストしたものを郷土史料室に配置し、閲覧に供している。

参考文献（五十音順）

- 石坂澄子2013「茨木市域における近代以降の寒天製造業の推移―聞き取りと文献史料より」『新修 茨木市史 年報』第11号 pp. 35-73
- 茨木市史編さん委員会2016a『新修 茨木市史 第二巻 通史Ⅱ』茨木市
- 茨木市史編さん委員会2016b『新修 茨木市史 第三巻 通史Ⅲ』茨木市
- 茨木市教育研究会小学校社会科部会2019『わたしたちの茨木』茨木市教育委員会
- 鹿毛敏夫2002「子どもと向き合う史料館活動～古文書解読と体験発掘の実践～」『博物館研究』第37巻第7号 日本博物館協会 pp. 10-14
- 大仙市2019『大仙市アーカイブスニューズレター』第2号 大仙市アーカイブズ
- 高橋修2013「小学生向け古文書解読プログラム開発意義と効果」『日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要』第17号 日本ミュージアム・マネジメント学会 pp. 29-36
- 高橋修2014「小学生だから読める古文書講座」事業の実践：新しい博物館教育論と資料論の構築を目指して」『Link：地域・大学・文化』第6巻 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター pp. 98-105
- 高橋伸拓2016「歴史系博物館における古文書の活用―茨木市立文化財資料館の事例―」『Musa 博物館学芸員課程年報』第30号 追手門学院大学博物館研究室 pp. 15-20
- 文部科学省2017a『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説総合的な学習の時間編』文部科学省
- 文部科学省2017b『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説総合的な学習の時間編』文部科学省
- 文部科学省2021「今、求められる力を高める総合的な学習の時間（小学校編）」アイフィス